

ゲタ小学校と老人クラブ

—コミュニティの末期的症状

神代雄一郎

ゲタになった小学校

横浜ではとうとう、小学校がゲタバキアパートのゲタになるそうである。ゲタバキアパートという名称は誰がつけたのか知らないが、なかなか庶民的でおもしろい。だがそれは、市街地のアパートの、1~2階あたりを商店や事務所にするものと思っていたら、どうやらゲタは何でもいいらしくて、電車の車庫やバスのターミナルがゲタになったりした。そしてとうとう、まさかと思われるものがゲタになった。小学校である。

この計画が発表されると、早速口うるさいPTAのオバチャマがたが、ことあげをしているという。エレベーターで通学できるのは、交通事故がなくて結構という賛成派、テラスにオシメが干してあるアパートの1階で、果たして教育ができるだろうかという反対派。いやはや、わたしのような先生稼業をしているものには、まずもってこうしたオバチャマがたを直接頭上にいただく小学校の、先生になる人がいるのか知らんと、心配になる。アパートの窓から校庭を見おろされる体操の先生など、まずなりてがないだろう。

大学のキャンパスでも、学生寮や体育関係の合宿所は、かららず教室や研究室と離れている。世帯くささと教育とはあいいれないものと思うが、買物籠を下げたお母さんたちがウロチョロするアパートの1階に小学校のある姿を想像すると、世帯くささを通りすぎて、なにかなまぐさい感じさえする。いつまでも離乳のできない子や、肥満児は増えそうだし、わたしのすきなイタズラッコたちは、いつどこでイタズラッコになれるのだろう。

もっとも、そんなことはいっていられないで、都市やその周辺の地価はうなぎのぼり、高くて買えないどころか、もう住宅開発をやる土地がないのだそうで、しかも人口集中は一向におとろえない。だから住宅開発は高密度化するばかりで、なんとか土地の買収に成功すると、そこに高層巨大なアパートを建てなければならなくなり、それが直接高速道路に結びつくような形がでてこざるをえないのだという話はきいていた。

こうなると、計画学が理論づけて、建築家が下敷きにしてきた、500世帯に対して児童公園や保育所が必要で、2,000世帯に対して

小学校が必要といった規定は、すっぽり高層巨大なアパートの中におさまってしまうわけで、小学校の敷地までは面倒みきれないから、ゲタ小学校にしようという案も当然なものとしてでてくるのだろう。コミュニティ計画の重心だった、小学校ひとつをもつ隣接住区がひとつの高層アパートになってしまえば、元来地縁的なコミュニティは鉄骨鉄筋コンクリート縁的になるわけで、土いじりや砂場遊びのできた子供の遊び場などは、この変化の中で、はぶかれ、もみつぶされること疑いない。

だがそれでいいのか。小学校や中学校の近辺に、温泉マークの旅館ができたり、ボーリング場ができるのに大反対する人たちも、ゲタ小学校には反対しないのか。反対しようにも、当のゲタバキアパートの住人たちは、これから抽選できまるのだから、反対運動の主体はゲタ小学校の建築ができてしまつてから形成されるわけだ。何ともうまい仕掛けである。そう考えながら、ゲタ小学校を報じた同日の同じ新聞をくっていると、今度は東京の世田谷で、小学校の増築に、日照権で近くの住民が反対している記事にぶつかった。学校と温泉マーク、学校とボーリング場がぶつかりあらのではなくて、小学校とその住区の住民とがぶつかっているのである。コミュニティのひとつの核と、その成員住民とがケンカをしているのである。こちらは何とか、増築する小学校の最上階の頭を斜めに切り落とすことだけりがついたらしいが、事態はここまで深刻化しているのだから、ゲタ小学校反対運動など、とてもやれないのだろう。

1円玉で建つか老人クラブ

最近、わたしの友人で団地の住人である人から、これもドキリとするような話をきいた。ある日、ドアのベルが鳴るのでぞいてみると、どこかで顔を見たおぼえのある老人が立っている。ドアを開けながら記憶をたどってみると、どうやら向かいの棟の、いつも窓からうつろに外を眺めていたお婆さんであるらしい。表情がいつもと変ってイキイキとしていたので、すぐには思いだせなかったのだ。

お婆さんのいうのには、団地の年寄りが集って相談した結果、団

地の皆さんから捨ておかれている1円玉を集めて、老人クラブを建てる資金の一部にすることになった。それでもしお宅にも1円玉があつたら寄付して欲しいというのである。友人はそれは結構だと思ったから、背広のポケットを裏返したり、台所わきの籠の底をはたいたりして1円玉を見つけながら、それにしてもちょっとばかり不思議な気持がしたという。いつもあんなに、部屋に閉じこもり、うつろな眼付きをしていた老人が、1円玉を集めにきた今日は、確かに陽気に、イキイキとした表情をしているからである。老人施設でも、老人ホームでもなく、老人クラブというシャレた名前、また自分たちでつくろうと明るく1円玉集めをやっている姿、それには思いがけないものに対する驚きを感じさせられたという。

公団アパートが建てられはじめてから、もうかれこれ20年にはなろう。あのころ40歳で入居したものは還暦に、50歳で入った人は古稀をむかえているわけである。その間、団地の建設は数をまし、規模も大きくなつたけれども、ショッピングセンターだの小学校や保育所などとともに、老人のための施設がつくられたという話は聞いたことがない。だが一方では社会的老人問題として—つまり老人人口がふえ、老人はやはり子供や孫といっしょに住むのがいいという考えにもとづいて、他方では団地入居者の世帯構成が、団地の年齢の深まりとともに、当初の単婚家族・核家族から3代家族（祖父母・父母・子供）に移行成長しつつあることによって、いまや急速に、団地コミュニティの老人問題が浮びあがってきた。

東京や大阪の市街地に建った、いまは古くなった団地では、建設当初にそれを借りたり買った住人は、いまでは老人になり、そのころ子供だった息子や娘は結婚して外へでて行く。だから住人の年齢構成はおびただしく老齢化し、いまに都心の公園で陽なたぼっこする老人たちが、ニューヨークではなく東京や大阪で見られるようになるだろうという。アパートの1室で白骨化した老人を発見するというニューヨークのミステリは、そのまま日本の東京や大阪でも、やがてあたりまえのことになるのだろう。

大阪では、こうした老人問題に対応して、古い片側廊下式のアパートに平行して新しいアパートを建て、新旧の各単位をブリッジで結び合わせ、一方で老人を収容することで、活動的な核家族のすぐ近くで、老人も生活できるような改革案を試みているという。まことに窮余の一策といった感じをまぬかれないが、団地が老人ばかりになつたり、あるいは団地で老人が生活しにくいのであっては、団地はついにコミュニティにはなり得ないだろう。コミュニティの成因である血縁的なものも、地縁的なものも、あるいは

運命的なものも、せめて3代が住まわなければ成立つてこないからである。団地はやはり仮りの住居なのか、仮りの住居の寄せあつめであつていいのか。

まさにそう問われるべきなのだが、この老人問題も、先のゲタ小学校と同様、なかなか簡単にはかたずかない状況なのである。それはこれまで最近新聞にぎわした、加曾利貝塚遺跡と老人ホームの衝突問題からも明らかだらう。ここでは問題は国道の整備と建設からはじまつた。道路をつくるといまある老人ホームにひつかかる。そこで老人ホームを移転することになり、その敷地造成のために加曾利貝塚をけずつたといでのある。有名な加曾利貝塚は主要な縄文遺跡で、国の国宝にあたるものである。それを文化庁の許可なしにけずつたといでのだから恐れ入る。だが恐れ入ってばかりはいられないで、かくもさように、老人ホームなどつくる土地がない状況なのである。

のけものあつかいされる老人ホームではなくて、自分たちで1円玉を集めて老人クラブをつくろう。その1円玉を集める団地の老人の姿が、かえって明るいといでのは、わたしの友人ならずとも、驚かされることである。だがその団地に1,000世帯が住んでいるとして、各世帯が10枚の1円玉を探し出し寄付したとして、それは1万円にしかならない。老人クラブは建つのだろうか。とにかくその運動をやっている老人たちの表情の明るさだけが、救いである。

コミュニティの指標——子供と老人

わたしがまず、ゲタ小学校と1円玉老人クラブにこだわり、そこから話はじめたのは他でもない。団地が、都市勤労者のたたべットの寄せ集めであつていいのなら、それは論外のことである。だが住宅団地をコミュニティとして計画し、そのコミュニティ化を願っているのであれば、まずそこに1日中いる子供と老人が、明るく平和に暮らせなければならないだろう。たとえば子供の行動範囲から、コミュニティの規模を考えている学者がいるほどで、子供と老人は、実はコミュニティの指標なのである。その成年男女を追いかけるよりは、子供や老人を見つめることのほうが、コミュニティ理解には早道なのである。

たとえば、わたしたちが毎年やっているデザイン・サーヴェイという名の調査で、昨年対象にした志摩の菅島では、最初に鉄筋コンクリートでつくられたのが、何と保育所とお寺であった。そこは鳥羽から船で30分ほどの小島で、たったひとつの集落しかない。人口は約1,000人、戸数は約200戸。成年の男子はすべて小舟を持つ漁夫であり、成年女子は、これまたすべて海女である。だ

から日中集落の中に入つて行くと、そこにいるのは子供と老人だけだ。こういう状態は、都会育ちの常識では危険きわまりないものだ。屈強な強盗でも現れたらひとたまりもない。だがまわりは海で守られているし、集落の人はみんな顔見知りなのだから、何の心配もない。子供たちは道でくにとり遊びをしているし、老人は道ばたにムシロを敷いて、つくろいものをしている。これも都會では見られない風景だが、島には自動車が1台もなく、この規模ではその必要もないのだから安全だ。

こんなふうに、子供と老人が、明るく安全で自由に活動しているのを見ると、この集落のコミュニティ構成がまことにうまくいっているのがすぐわかる。それは日本語でいえば、里とか郷といったものだろう。そこを出たものがふりかえって、故郷と呼ぶようなものだろう。事実、盆と正月には、この集落から出たものもかえってくる。こうした集落、コミュニティは日本にもたくさんあったのだ。だがそれは現在、工業を誘致して都市化したり、あるいは過疎になって消滅している。

元来コミュニティといでのは、それが漸次拡大して行くと、その役割は逆に縮小して行くものなのである。日本のコミュニティは、過疎化と都市化というふたつの現象の中で、どんどん崩壊して行った。そして、新しく都市周辺につくられる住宅団地の建設にあたって、建築家たちはそのコミュニティ化を計画した。だがそこでも、状況はついにゲタ小学校を出現させ、1円玉で老人が老人クラブをつくろうとする動きさえ生んでいる。古いコミュニティも新しいコミュニティ建設も、なだれのような勢いで崩壊に向かっている。これをコミュニティの末期症状と見ないで、何と診断できようか。

住宅団地では、ともかく何とか、子供は優遇されてきた。子供の遊び場はあり、同じ小学校にかよう家族間には、つきあいも生まれた。だが成年男女たちにとっては、テニスコートも、ゴルフ練習場もない。成人のための設備はないから、休日にはみんなどこかへバラバラにでかけて行く。コミュニティ化の芽は、子供を媒介にしてしか生まれようがなかった。その遊び場がなくなり、小学校はゲタになろうとしている。婦人たちがますます白い眼をつきあわすばかりになるだろう。そしてそこに住む都市勤労者たちは、ますます出かせぎ人に見えてくるだろう。地方からの出かせぎ人が、古いコミュニティの崩壊現象のひとつであるように、通勤時間の団地住人の姿が見えてくるのも、団地がコミュニティではないことを物語っているのだろう。コミュニティの崩壊は決定的であり、しかも社会の基盤にコミュニティなくして、共同体意識なくして、国家も民主政治もあり得ないだろう。

1,000人200戸、1人1,000坪

コミュニティは拡大すると、その役割は縮小して行く。過疎と都市化の谷間でコミュニティは崩壊しつづける。だからもう日本では、辺境の岬のはずれとか離島へ渡らないと、コミュニティを発見できないし、コミュニティらしい雰囲気に接することができない。そこでそんなところを5年間渡り歩いて、コミュニティの条件といったものを探しつづけている。いまそのなかでひとつ、規模について考えてみよう。

先にものべたように、昨年調査した菅島集落は、1,000人200戸という規模であった。そこでわたしたちは、濃厚にコミュニティを感じた。今年調査する、高知県の西のはずれ、足摺岬の近くに浮ぶ沖ノ島には、弘瀬・母島というふたつの集落がある。これもそれぞれ、ほぼ1,000人200戸とみていいらしい。社会人類学者のいうところによると、日本には、1,000人200戸という規模の集落が多かったということである。つまりは、1,000人200戸という規模が、自然発的に、コミュニティを形成しやすいのだろう。この規模だと、人びとはみな顔見知りになり得るし、ボスも生まれないセコジキもでないのだという。菅島はたしかにそういう集落であった。各世帯は年収500万から100万で、大金持も貧困者もいなかった。

こうした数字から見ると、どうも建築家たちは、コミュニティを大きく考えすぎていたと思う。だが、コミュニティは拡大すると、その役割を縮小するのである。つまり、世の中には2,000人も入る大オーディを建てたり、市民に開放された大庁舎をつくるのが、コミュニティに貢献するのだと考えている建築家が多いようだが、わたしにいわせれば、堂々とした大きなものをつくろうとすることは、かえってコミュニティを拡散させ、コミュニティをこわす活動でしかないようと思われる。

わたしは他の雑誌で、最近横さんのつくった金沢総合庁舎について対談したとき、あの600席という規模の、小さなオーディや、それにつながって建物に囲まれ保護された小さな広場について、激賞した。それは、この程度の規模のものが、コミュニティの回復や再建にあたって、もっとも有効だと考えるからである。600席という規模は、立つ人までつめこめば1,000人に入るし、また1,000人というコミュニティの主要な成人員の数は500か600くらいだからである。2,000席の大オーディを建てるよりは、600席のオーディをふたつつくったほうが住民の共同意識を強化するにはいいので、こういう小規模のものが、バラバラとたくさんつくられて行くことは、いまの日本で大切なことに思う。

それでは、1,000人200戸というのが日本のコミュニティの典型的規模であるとして、それがどのくらいの面積を必要とするかを考えてみよう。といふのは、先の菅島でも、沖ノ島でも、これら小島は当然面積がはっきり限られている。しかも、集落の人口は、不思議と長く、1,000人200戸程度を保持しているからである。人口の自然増分は、自然に流出していっているのである。このことから、人間がコミュニティを形成して暮しつづけて行くには、1人あたりどのくらいの面積がいるかは、割りだせそうに思われる。それは菅島の場合、1人あたり約1,100坪であり1世帯あたり約6,400坪になる。沖ノ島の場合、それは1人あたり約1,700坪であり1世帯あたり約7,000坪になる。このふたつの島の相違は、沖ノ島が不毛の岩肌の多い地勢であるところに起因しよう。だからこのふたつから、せいぜい1人あたり1,000坪、1世帯あたり6,000坪といった数字がでてこよう。つまり、1人あたり1,000坪をもちよって、1,000人の人が集まれば、集落は規模的にはコミュニティ化しやすいのだと考えていいのではないだろうか。

山や海がやったように囲むこと

わたしがアメリカで暮していたとき、日本の4つの島を見てまわったというアメリカ人に会ったことがある、4つの島というから、佐渡ヶ島や大島を見たのかと思ったら、それは本州と北海道と四国と九州だった。なるほど広大なアメリカ大陸に住む人から見れば、日本全体もまた小島でしかないだろう。先の菅島や沖ノ島は、その島くずでしかなかろう。すると、菅島や沖ノ島が、自然にコミュニティの適当な規模を保持しているのだから、日本という小島も、自然にそういう力を發揮し、コミュニティ保持の作用をしているのではないかと考えてもみたくなった。

そこで、昭和45年調べの日本の総人口で日本の全面積を割ってみたら、1人あたり約1,100坪という数字がでてきた。菅島や沖ノ島が、ざっと1人あたり1,000坪であったから、この数字は一応、日本がまだ面積規模的には、コミュニティを内蔵し得る可能性を示すものだと考えていいだろう。しかし、日本の人口はどんどん増加している。面積のふえることは絶対ない。だから、面積規模的に、日本はコミュニティを内蔵し得る最終段階にきてしまつていて解釈するほうが正しかろう。つまり1人あたり1,100坪という数字は、ゲタ小学校や1円玉老人クラブとともに、全国的にみて、やはりコミュニティ末期を告げる現象といえよう。これからはもっと急激にコミュニティが崩壊し、再建の可能性はないことを示しているのだろう。

ついでに、東京都の全面積を、その全人口で割ってみたら、1人

あたり570坪という数字がでた。ざっと見て、全日本や、菅島や沖ノ島の割合の半分である。わたしたちが東京に住んで実感している、コミュニティどころか息もつけないような圧迫感は、数字的にはこういう状況なわけで、ここでたとえば、団地の建設にあたっていかほどコミュニティ化を願ったところで、それはむなし努力に終ること必定といってよかろう。

それではどうしたらよいのか。先の菅島や沖ノ島が自然にコミュニティを保持している姿を見ると、わたしは、その要因はこれらが海に囲まれ、ある程度の地理的隔離をそなえているところにあると思う。そう考えて、本州の、拡大し都市化したけれども、それでもなおコミュニティといった感じを維持している町を思いだしてみると、京都にしても、高山にしても、みんな山に囲まれた盆地都市である。そういうところでは、地域的な方言も残り、郷土料理も残り、コミュニティの内部構成も残っている。

コミュニティといふのは、先の例でいえば1,000人200戸という規模であればいいというものではなく、それがさらに、40から50戸ぐらいたずつのエフェクティブ・グループとかアクティビティ・ジョイント——つまりは組に分かれていて、日常の生業も祭の行事も、それぞれの組の頭の合議できまって行き、その組相互の競い合いが、コミュニティのエネルギー源になっているものである。それをコミュニティの内部構成とでも呼べば、それは京都の祇園祭や高山の山王祭に、まだはっきりとみとめられる。そういう内部の組織は、平野の、だだっぴろく拡大していった都市では、もう消滅してしまっているのだが、山に囲まれているといった自然の条件とか、あるいはヨーロッパの都市に見られる人工的に城壁で囲んだものとか、奈良平野の環濠集落とか、とにかくかっちり囲み、規模の拡大が規制されているところでは、かなり高密度化しながらも、あるいは少々囲みをのりこえて拡大していくても、コミュニティの内部組織は温存されつづけているのである。この同じ欄で、2月ほどまえ上田さんが書いておられた京都のかわら屋根、京都の保存したいものとは、京都がいまだにもちつづけているそのコミュニティ的なものなのだと、わたしは理解した。

日本には小京都とよばれる町がたくさんある。それはたいがい盆地都市で、3方を山に囲まれ、内部に川が流れているといった場所である。この型こそは、米をたべる民族の、農耕民族の集落が自然に形成されたところなのだろう。わたしは海に囲まれた小島でなくても、山に囲まれた盆地でなくても、人工的にでもコミュニティを守り、コミュニティ化を促進する方法はあると思う。それはまず、適当な戸数、適当な人口をくくり囲むことではないかと思う。そういう配慮を、団地の造成にまずのぞみたい。